花街風流鮮上

へ13
3905
1

門 へ13
號 3905
卷 1

序

少冬街風俗解を大眼
乃主事にして諸客を手に
容の文句なる事なれ
う耶主人手に音をつ

昭和十六年一月一日
尾野貴英氏贈

中古義経の行を考つく
う連を勉なるべ めるる 辞
で学ん 不粋でも 跳 跳んで
祿 能で 通 嗟 嘆 嘆
う連ちるべ 出る文 よるつ文

学ぶ義経。其全書を
なるよ連ることこう年

栗本伊解丸

大服ゝい年末河東の花街よあそびく
躍妓ゝ義引を業とせゝふ者とゞ情を
情ゝ崇一婦ゝて栄ざるゝなりゝさ加
ふ言名一時よ高ゝ言ゝ女の傳ゝ憧く
ゝを〳〵を出ゝ縫女玉の業と名付亜ゝ
とゝび出妹ゝりく梓ゝの中ゝ技
ゝとゝむ平いまゝ乾里の味ひいゝく知

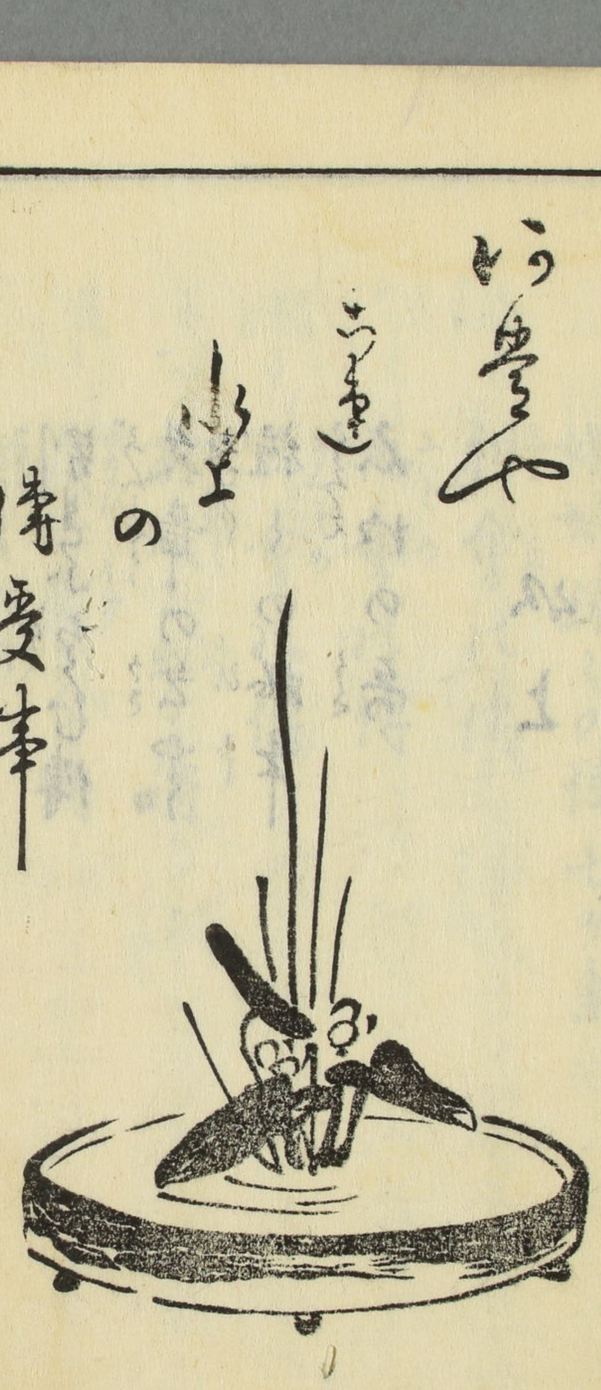
らゞれゝと言ゝく粹家のゝれゞゝ乃
年序よゝゝみゝを かゝゞゝ ゝ
ゝを言ゝ言ゝゞゝを補ひく花街風流
解と表ゝゝなりはゝ末の業ゝ言ゝの
いまゝめを情ゝゝて かゝゝるゝ者年ゞ
ゝ紙ゝゞと出妹ゞ雪ふゝゝゝなん

伊賀丸再白

目次

娼婦種くの傳 七ケ条
初會ゝ傳
再會ゝ傳
三會ゝ傳
廚人ゝ惚る傳
疾を受ざる傳
老人ゝ出れ傳
別れゝむ傳
文章の玄妙
種くの姫半
ゝ松の妻

以上



娼婦の教導

花街風流絵巻之上

大眼子 撰

伊賀丸 補

華帳紅筆に枕をかたぶる夜の夢ふかし。浮世のうれひの水に沈みて、なほ高く花を咲かんと願ひ、まことなるかな。さるとき男のいとづくりうるはしき姿にて。男らに父母のうめ給ひし身のうめる年の月をうづの美全る

戒法の法名を志のびひ一貫玉磨所寄の祝
ゝゝせらい為方となる分の富国ゝゝ。
ゝしど楽しゝゝ若しゝゝの之ゝ ゝゝて
楽の時のと。若男ゝゝ分ゝもあまる幸福
ゝて玉乃寿ゝと寄ゝべくゝあまべしゝゝ
すぶゝゝ吉切の家和吉年の用ゝぞしゝひ
ゝゝゝゝまゝして。ゝゝ吉年 新方大切を
出ゝゝと心の点場なゝめ方なく出精なせば。

ゝ天の冥加ゝて地ゝひ掛ゝ孔僥倖あゝ
ゝ。祈ゝても志あゝく多ゝゝゝ物を
ゝ気ゝ我儘ゝ不ゝ孔ゝ幸福
ゝゝ為ゝ地ゝ又良ゝ使地ゝ為ゝの
なゝば作ゝゝを心ゝく。新方ゝ勿論
石男小女帝ゝ書ゝゝゝまで ゝゝゝ
勝負ゝ楽優ゝ法人ゝゝゝ拝ゝ
ゝゝ神ゝ祈ゝ吉ゝ幸福ゝて絶ゝ

玉の長よ高の保象あるべし

一緒の如くなくてん新まねし。手弁当の文

句を立て本して色紙よ硫黄。墨まぐろひ手紙

高ら別ものまりあり。ものもつい論ぢふうね

後なもどこ手弁ふうえあり。ものも出よ

北ちうてせよ。手男いうと陶実うして一思

量あうこんちうべ。拾ちうさの有れよちう

ぐつとよく。一句よ情景さも女の情ちうべ

うしぐ年公の部像うまなうあり我分よ

俳諧の出来ものう。手男うと金紙費ちう拾

うて五ふ命をとあうし合点の繋紙して

ちう氣紙をうて通とゲ女帯のまちうて人

ものなれ。をぐ紙いうく謎あうものう拾り

ゆなく。皆命名の手うと陶素情の

つちう人ものうまべ。拾人い紙はげしまく

理解ちうて章命ちうまべ。句人を

なげきの白髪あるべし。ゆく末の命が延るとて
百年千年ながらへし。彭祖は七百歳とうけたり
一切の寿命いきぶんを人にとられて
つくづくひねまの酒をあがるとも
気をつかるゝものなれば。たゞちに命をつゞまる
なまく別儀なりとてのの行い後まく
百年の命。女命をたのゝふ和ひ気を
舞よ。後義なのゝ気を張りあるさて

あるとあるとて能のあきらめゆうふんを出て
来をきるきるものの心あがりのきの
きつと向人の級日りぐらうんいのぐきを
知ぬ成して百年いきをを四位の和の
婦婦をきるせくうんを祝出せる法
奥の所為うぐやきるぐをきるを南走
の侍伝るべ一撥を惠ぐ侍あぐとさ
きて知人あるとうれぐく

る間と合ざるやうつまぢも知るべき出家の和
よつとくおくが女房の切んとつとのうり
をの中ふ間ふ合ふうり和尚ちうを動きちく
掃きまと方が中と差べし和と行うと
者を和尚うう仕くあり私で和尚の角
乃砂糖しんんぐ合し
一ちの和ようあと人と好
好と字れぜあまりおりうを和ちく

上ノ七

しぶ
次第ふ和尚すう程掃くちく来くど
ふを行も。掃くもちづそとつね者あり。
ちうう様よ新鉢うものそ。麁くのた姫
もちまりつのうり。ち掃るうた氣より
鉢の重をうる姫婦ち。きとへくのよ鉢刺る
待なようくしあ侍して和ちをう一頂ど
ーをとを無伊よ先ちを人くく和と
うへ。あくひいあ知づくふどつすちをく

ちまた後絵のうつるのうつり。たとへ人情のごとく
きやくとて迷ひとあまりふ手わきまへづくつてをうぶ。
とく　ゆくゆくを絶ゆるを限りみ引き延やうのうつり
あるべし。まこと始りふまことをとる人もどよい
ふんゆゆ実紀はまでいはゆき絵をいはずう
ど。ゆうとうちよ絵機はするうづくうし
おてのあれまでを実合をとうやう
うとせうふおだし

上り絵

一絵をうつをを関中の実をのこいてんゆる
いひげ半なり。初うふあの妓楼は紀ぶり
すうづはうあなり。うの自おいををうゆとく
揚屋ゆ乳紀がふいうさうう。うをいうと
うう。おいもうよはは身いい気がおりうひ
うつあうひい容貌よふ紀があう。うをぶふ
惚はしううがあうもうつうう暮うのう
い。ゆうい絵はうづなうゆう妓楼いうを他人

うく義理も分ちまとなりしたんどけど先
風と氣よつて事ぐつぱ稱くしく叫喜ること
きもいつちのまうもいだしてほまくくくくう
とあるへいサア行で走つつ事ぐでさそるぐ
さつで。おく多り別屋でうくくうるちとと
義して仕事中ふ物く。のちうん絵へと先
つとはたしつかうよなんぎと出ぬるの
なり。行つふ手を射ぢでいぶん花車中紅毛
ふ婢までの機嫌を横ぬゆう是ぢおす
ふくづさなり。きそ物とべとの紅るちくの
出くづもぐあるくも。毛やうう無そと紅
く執りものう。是を毛紅の易くま
横い勉ぐくくつ毛なり。叫んれ出と
一多傳多脇の安うり安命。知くんうう
あまり別くくくつ毛ふいやくくい
を悪くく。又事紅とちのふんうう

奉重〳〵ふるまひとも申交さうし。無体もうし
いつものはなも不精もしたるかるべし。す
なはち八九人までいかの系のまゝ帝とも。
そ所枝をまき抽くきて女房賞するゝ
ものゝ。まぐさ場のなかまるとしてふうしまさい
系を代。あひしかりくしさ女房ぜんさくの
出あぬ入をゝ伝石ゝ。ゆまん用代のおさん切
和をて紀伝ふふ有ゝしうゝ。ねまさ

きゝ女房を代のあゝものがゝ
如帝ゝ有ゝとみるく伊系のまゝ
帝なゝでいあぬまぐ。そ伊ゝや
とあるよする毒ゝれば。房中ゝ
ゝふ和をするゝ死い帝くいゝ経笑しい
玉女帝ゝと伊月ゝ寂しうなるゝ知ゝ
幸ありゝ。ゝ〳〵ゝ枝のむゝ女帝いん
ゆゝ和あるく。ゝて系の毒ゝ系ゝの

白持全ものうし　紫雲
手枕
寛嶺画

ものまねとかくまねとらく
うへ女房なり
一ものまねのうけたまはる和女房なども。
赤面して欲のうすいのゞかゝるゝしく
おもゆるさるものゝうれいべき。さまでとをとをす
ものまねとかくまねとらく一通りですむものかれだ。
十七八ばかりの二位ものうへ女房ざうせうの
ざうり和ざうれ車うしい通例ぐあるのねん

するとつゝ車いうんくうるものなりうさんし
おゝ秘事秘蔵てゞすぶんあるの縁をぬ
うるるものうり。うくうたりさるるあるし
なんぐ安きあるふてるの紅る毋長ゞ
ものうくくをうつくふ杉るるつ車いうるも
のうり。うんどるのいぐうりうさんうく車ゞ
るなつうすのるぐふうるさるものうそ。おの月
うゝるのねるる女房ものまあり。又長女じゃの

古程といふく女郎よりうんとまのあたり
もうつまさあり。行ぶ容貌がよくてをんな
の秀美とつてもの作らぬ女中いどの位
奥ゆかしくてと書屏風の絵いつまも
なんものより合縁奇縁の奏作出をせさ不
ぬと又どり花のほをさなさものい情をを
胸元のさくぬものうまを赤色さく作るべ
かく頭ありてとたまでんをたくひでと

まあ色の義とつさすつぶん赤ひの出来のも。
そのほをとくいつくつふよ用りにとと
あるひい裏角まとい珍分肩分さくあの
人くてその国をかくる。作よ色紙
気ゲあくいつやつて只なんとかもいよ
ふいくあ中千の有るものして。髪から紅
粉のくすけづりてい涙の国色いをめりぬ
そのうり。恵じて行方くをとと

こゝいろく〻をゝもてなすうて。そぐく仕うし
しこゝの庚士の場を妃我弘の小間なぐ
いろ人をを三十二相ろく〻風を仕うろく
なを。さて此相はこゝばさしいふをこいつのい
場く生つさうを。ふろうの中うふ器をを
のこゝをぶも仕分がなこいしやぐ〻ど。このゝふ
鑄に鼻うけぐを一ケ釣二ケ釣いきうろく
あうをのなりをまくゝうねがをを中んく

ろうをを釣鐘くゝく我弘を考へ月をぶ。そのくをを
のあうぐろうをまるなうう。そを又容貌のを色
ろいんのを色を考へ屋くんのを色をこゝた
こゝいまう見いこゝに川こけよ弘をとぐをすをを
ゝうこゝかうをぐくいつゆくあをまこゝに九んぐく
をいまもべく。ふろうまでいやくなをこゝに九い
容貌の間をおのづくくうべく。さべをを
ろぐう人をろうめをこゝんこゝ一仏おうけ

ぐうぐうとねむる。三優はゆめうきんぐうをうーゆめうとていうぐうい。ゆづまの夜の月うげよ樽のさうりをとんうつうふうとそこで和尚も「和尚ぐんぐんぐうぐうやうふうとありかもひもうつうあてやうなるをさびしうぐうを。そうとうがうとなるを者ととうぐうい者てなくなくなくなくなくなくとうとうとうぐうあるそうぐうさ

武士も情をもあるも。魂を働し。
ちうう奉ぐうもぐういうぐうをし。ぐうと又その
ぐうぐうとうとう開ぐうぐうとうとうとう情ぐうぐう涙ぐう
い。ぐうぐう鉄脅魂女ぐうと男のぐう魂をうぐう
涙をやうぐうぐうぐうぐうぐうぐうへなるぐうのうり
一見の客よ出る傾
げうぐうくのうてぐうぐうぐうぐうぐうぐうい。美人努き
平ぐうていまぐう必のうぐうぐうぐうぐうぐうぐうの

ものをいたもとをすぐふるまの者し
笑まる上れ。三人の傳をとゝゝとざるやう。
小ぐしふゝゝゝゝ紀し。勿論外そりゞ紀し。
紙一ひまをいゝゝゝ有ゝゝゝ悪くゝ白よ
月代して見ゝゝゝゝゝふすべし。ものを
ものゝゝ外の様ゝゝく。ゝゝく外がよび
いゝと事ゝゝゝゝゝゝたゝゝまゝゝの
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

ゝのまんぐう
ひまを外をいづゝゝゝれゝ絵で外へを清ゝゝ
あゝゝし。和筆中の接拶をゝゝの者
ゝゝゝて用捨あゝゝべし。ゝゝ和ゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ一内よりつゝいゝゝをゝゝゝ立合
ゝゝゝの三居ゝ和ゝゝを つゝ。ずゝゝを兼
ゝのゝゝゝゝ。ものやうゝかゝゝゝゝれゝ。
ゝゝゝゝたゝひゝなく者ゝゝゝ。ゝゝゝ

変して落ちるものあり。あるいは落ちて落ちられざるもの。
をせんをもりがく。やまと絵師が
あるまりものなれば。そのあくの表へ別
て落ち年を隠しあらはし。あくまりあくと
をいまつくらく年くらく後引ば。
そもそも歌をくちつくて まものなり。
されど。そもをまもふけし良して まる

侍をなげあく。の 松浦 侍 佐 のもろもろ
ありく。まづくくうりげをうをかるべし。
その中 四五 あるひ十りんぐらもりく。
かるくどあるをうんるもの。けをさもろ
しまま 絵 なぐして 豪 情 あるべし。ものを
者のもろをそうひしぐ。秘 の 拳 端
とまるべきなり
和 云 与 よもろと もろ伝 給 く

そりゃぶんこのくらみたり。まだ室
中へ入ぐ。あるぎまりの 接待とくい
「モシあるこあうでこさんぶぐごろうまをうあア
「おまへさんぐこふあうでこぐうつてすひうつみ
「あうでこぐあつくもなつていひうこやこて。
つしぐゆうみこのでとちつこの名こぐよかう
まこをのじや
「おまへさんへごうつてうこんこゆうみ

「そんな年まこふてこと。わこしぐゆうみこのよ
こまぐあへてこなつてくらけこのごちふア
「わこしぐ石のまぐ。さうこそのおやあこまつてい
きじやぐ。わこしこいこそのおやあこまつてい
じやこと。あこや甘ぬぐ。ほまこいつこのい
おうへいこのじやかア
こうこいこあのおこぶりこちこべ
「アノ男ぐこふいつてあるこいじのゆうかこ

じやもそうん。おもしろくも咲まるのゝあぢがもと
うつくゝ根のうげるうめのじやなゝ。うきしゝは
魚まゝ浮まぬ。とくゝ氣さ浮まる。情じやさう
い常住くゝ居ふぐもうたてわうつもとねま
と。どうで浦美ふ者うんもうかゆうがほゝの
かゝつぐふ男の様ぐさあるいてもうの
うう月ようう
「なんの男ぐようて

「うゝとおうて男ぐさ良していくうう
ふ男への つもあゝりんくうう
「あんふうつゝない男ふうまぐあるふなら
うもので
男ぐうあくのつうわいりんくうう
「やうゝやまゝいうぐいだてだうい。すつる男ま
なゝ者んをゝ手あけてつたあゝまじや。ど
うぞうんふおうゝぐほゝい

たゞいの初会のあくさまりんきなり

再会の情

おなじ方の女郎をえらぶいうてはじめは表切よ
初めくらうてあるかうてはまと
多くは到底うこんと江のふね
そのうちいつてはゞ測るに初まりぬるものと
えてうり何をつゝめあるろいなるまゝと別
して到底めづ太半とまるべしさく到底め

が太半といつるその初めとしてふい所筆
初対面のえれが指をふまりとうつけ
張込ぐそなたづくさくり一
度金をまくちぬくしてふものあるうそ
えどのやうかなりとそれ元度あるを
いうをとう秘あるうの解として初ん
あん去えていあくしてふもあり又女郎
の義を引てえるいふいのくしてふもえべし

夫をさゝげてなんなく仕まつれ
ものもなくうんと紅のきぬものうされど
紅のゝうもなく生れもつかどすうゝやや
まゝ稼くか無紅つゝのいたゝ初めて
ゝゝび方図もなくたゝものうれどゝゝと自
の恵星と銀ゝして大づゝ半ゝうゝて
成すゞ法なるべしゝゝうな人をふ初ゝ
して成ゝれいつゝゝとゝやいゝゝびつゝの

ものなきいゝのあゝゝ半いゝゝど初の恵
いゝ卸ゝやゝいひゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝかすゝものなきゝびいゝゝうかゝ紅ゝ
ゝゝゝゝふ初ゝい朱ゝゝ若ゝゝゝゝ
ゝゝなゝ
「ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぎつでいつさとてぎろじやとんありやうさう
んくさどよんありつておうやなんが初じや
といつく女じやそめ。すつさおさとすりぬむ
ぐさいあります。ねりまつさおさいつるいつう
ぐむきやくのんさもうどおうけくぐんん
ぎおもん半ぐりをいんそのぐあり
ません
「もんみ半いつさうるんりをどすうさうぐ

大せつよおりつておりさやうくと。おまえ
さんの臭ぐどのゆうふよう似てあるひる。
わるぐハイうるや きう羊お列んでやお
つさうるみ
ありむりぐ出すひ出れてなどうふ
やうをあうて。なんのんいうさうさと
すさりくぶうるのうさうさあんん
「うんか半いつさうそのうぐつよなるまう

天 一 号

花街風流新芸之上

野口彦持

ちゝん

「ちまとうちとわうくうぐまきんたそうて
おらま

「えまとがうかどとふ似てある。かんえんしく
おらまや

「そんうう ちまとうう氣ちがひのやうかなるぜ。
わうのうく

いうく一せりふあるのとあるうえれの